

## 共食いされた超小形のミズウオ

岸本浩和



Fig. 1 2017年1月23日に三保半島真崎海岸に放置されたミズウオ。口から釣り糸と釣り針がのぞく。

今年の1月23日、いつものように三保真崎の海岸を早朝散歩していると、離岸堤向かいの砂利浜に体の後ろ約1/3が鳥に食いちぎられたミズウオの残骸がありました (Fig. 1)。その胸鰭前部長が約18.5 cmだったので、全長はその7倍の130 cm、体長は6倍の110 cm程度だと思われます (倍率は体長79 cmの別個体の値を適用)。その口から釣り糸と針が覗いていて、引っ張るとお腹の膨らみが動きました。そこでお腹を裂いて中身を出すと糸の先にあったもう一つの針に体長16 cmのユメカサゴの顎がかかっていました。カサゴ類を釣餌にする人はいないだろうし、そもそも大き過ぎるでしょう。恐らく釣り人の獲物をミズウオが横取りしようとして釣り上げられてしまったに違いありません。ひごろ深海性のミズウオが浜に打ち上がってくるのは何らかの原因で衰弱ないしは息絶えてしまったものばかりかと思っておりましたが、砂利浜から投げた釣り糸が届く範囲の浅瀬に捕食するだけの元気な状態で居たということが驚きでした。この個体に限っては釣り上げられるという死亡原因がありましたが、打ちあがってくるミズウオの死因を考える上では厄介な事実のように思います。しかも、ユメカサゴは普通水深150～200 mの深海に生息しているとされている底魚なので、これもなぜこんなに浅い所で何をしていたのでしょう？不思議だらけです。

この面白い現象を写真に収めて (Fig. 2)、真っ黒な胃袋の底を見るとまた別の魚の顎が見えました。崩さないよう丁寧に取り出すと、ミズウオにしては体形がずんぐりしていて、やけに尾鰭が大きい体長23 cm、全長28 cmほどの魚が出てきました (Fig. 3)。貴重な標本の予感がしたので、地球環境史ミュージアムに標本登録して

(SPMN-Pi 40394)、詳しく形態検査したところ (詳細は別報予定)、重要な点ではミズウオに一致するのでその幼魚だと思われます。中国で出版された図鑑の中に黄海で採集されたという幼魚 (体長17 cm弱) の図があって、背鰭の輪郭の違いを除くと今回の標本とよく似ており、ミズウオと同じ学名が付されていました (Chengyu, 1988, fig. 109)。背鰭についてはほぼ半円形に描かれた文献がほかでも見られますが、少なくとも駿河湾のミズウオではそんなことはありません。ミズウオの背鰭は非常に大きくて、全鰭条を立てることが難しく、そもそも壊れていることが多いのでまともな形状をとらえることは困難です。そのため想像して機械的に描いたものが少なくないと考えています。

三保半島ではこんなにちっちゃなミズウオが打ちあがっているのは見たことがないし、もっと大きくて、スマートな体形のものばかりです (本誌24号参照)。過去の研究報告を当たってみても、三保半島周辺で採集されたミズウオを248尾も調査して体長は54-125 cmで、そのうち50 cm台は2尾しかなかったそうです (Kubota and Uyeno, 1978)。ハワイ近海で延縄によって採集された221尾の調査でも43-180 cmで、より小さなものがあつたとはいえ40 cmを超えています (藤田, 1996)。今回の標本は、このような成魚と体長わずか1 cmの稚魚 (稚魚図鑑) の両者の著しく異なる体形に成長変化する過程を証明する、貴重なデータになるでしょう。

ミズウオの幼魚だとなると、“共食い” だっ



Fig. 2 ミズウオの胃内容物の一つユメカサゴの顎には釣り針がかかっていた。

たということになります。私の観察では過去に1例だけ、昨年の4月に発見した推定体長120 cmのミズウオが100 cmのミズウオを捕食していました(全長140 cm/120 cm)。また、東海大学海洋科学博物館の「海のはくぶつかん」26巻3号には全長140 cmのミズウオが109 cmのミズウオを捕食していた例が写真入りで紹介されています(鈴木, 1996)。しかし、Kubota & Uyeno (1970) と Kubota (1977) の2つの研究で、三保半島周辺から採集した合計109尾のミズウオの胃内容を調査して出現した魚類514尾中に含まれていたミズウオは体長98 cmの未成魚1尾のみだった(Kubota and Uyeno, 1978)ということなので、ミズウオの共食い現象はとても珍

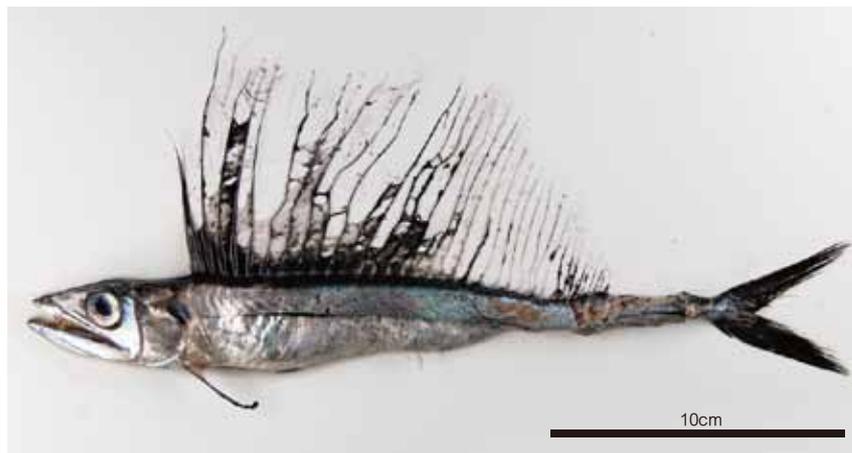


Fig. 3 ミズウオの胃中に入ったミズウオの幼魚  
SPMN-Pi 40394, 体長 23 cm.

しい現象なのかもしれません。ところが、北大西洋や南東太平洋では被食魚類の13-16%はミズウオ幼魚の共食いだったことが上記論文で紹介されています。駿河湾だけが特殊なのだろうか??

## 図書紹介 静岡の植物図鑑

静岡県の普通植物 上 木本・シダ編

杉野孝雄著

紹介者：ふじのくに地球環境史ミュージアム  
研究員 高山浩司

「植物の名前を調べたい。でも、どの図鑑を買ったら良いのかわからない。」ミュージアムで働いていると、時々そのような相談を受けます。そんな方には、迷わずこの本をおすすめしたいです。

上巻の木本・シダ編には、静岡県の平地から山地で普通に見られる600種の植物が取り上げられています。普通種だけを扱っているので、ハイキングしながら気になった植物をその場で調べるにはもってこいの図鑑です。普通種の選定には、著者が長きにわたり静岡のフィールドを歩いた経験が凝縮しています。また、多くの図鑑は組版の都合もあり、生態写真を切り取って使うことが多いのですが、この図鑑ではカメラのサイズ比の写真をそのまま使用しています。この創意工夫により、著者がファインダー越しに捉えた植物の特徴が、読者に余すところなく伝わってきます。厳選された美しい写真の数々は、著者の植物への熱いまなざしそのものなのです。さらに本書では、従来の科名と最新のAPG分類体系(分子系統樹に基づく分類体系)に従った科名が併記されているため、植物分類学の新展開を垣間見ることができます。下巻の草本編も待ちきれない、そんな気持ちになった一冊です。

なお、このたびご紹介いたしました『静岡の植物図鑑』は、自然博ネット事務所にて、著者割り価格3,000円(送料込み)で販売しております。

《ご購入方法》

メールまたはハガキにて、氏名、送付先住所、電話番号、購入部数を明記し、下記までお送りください。申込み後、こちらから本と郵便振込用紙をお送りしますので、郵便振込用紙にてご入金ください。

お申し込み先：422-8017 静岡市駿河区大谷 5762 ミュージアム内 NPO 事務所

メール：bureau@spmnh.jp

